

人口よりみた宇目町の

歴史地理的考察(一)

矢野 彌生

(会員・佐伯市中山区)

はじめに

宇目町の人口現象、おもに明治以降の総人口の推移や人口分布と人口密度・人口構成・人口動態の四領域について歴史地理学の観点から考察を試みたものである。

恵まれた自然、広大な土地面積(県下五八市町村の中では第五位)を有する同町。しかし、このすばらしい生活舞台が十分に生かされずに過疎化が著しく進行しているのはなぜか。その過疎化の実態や要因・問題点などを考えてみたい。

一 総人口の推移

〈明治・大正期は緩慢な人口増加〉平成八年(一九九六)

の宇目町の総人口は三九九九人で県下三六町のうち第三位で、人口規模は小さい。

宇目町の人口は第1表・第1図で明らかのように、明治・大正期は人口増加が緩慢であることがわかる。また、明治・大正・昭和の三時代を通して我が国の総人口が約四倍増加しているが、宇目町の人口は微増、微減をくりかえしながら推移しており、人口停滞が続いていることが理解できよう。

我が国では、大正

九年(一九二〇)一

〇月一日に第一回国

勢調査が実施された

が、そのときの宇目

町の人口は七〇六五

人と計上された。昭

和一〇年(一九三五)

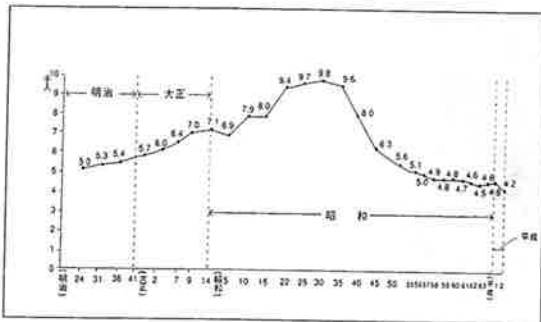
から一五年(一九四

〇)までの五年間に

宇目町では一〇二人

の微増にとどまって

第1図 総人口の推移



第1表 世帯数と人口の推移

(単位：人)

年 度	世 帯 数	人 口	男	女	摘 要
明治24年	1,067	5,032			明治24.12.31人口 重岡村 2,616 小野市村2,416
25	1,061	5,111			
27	1,071	5,223			
29	1,092	5,253			
31	1,110	5,372			
36	1,113	5,458	2,770	2,688	
41	1,139	5,777	2,910	2,867	
大正2	1,163	6,002	3,047	2,955	
7	1,240	6,429	3,295	3,134	
9	1,576	7,065	3,766	3,299	第1回国勢調査
14	1,602	7,191	3,803	3,388	
昭和5	1,496	6,998	3,654	3,344	
10	1,735	7,982	4,281	3,701	
15	1,735	8,084	4,269	3,815	
22	1,961	9,418	4,774	4,644	
25	1,917	9,738	4,959	4,779	昭和25年行政区画の 変更により、大野郡 から南海部郡に編入 される。
30	1,968	9,898	5,068	4,830	
35	2,013	9,671	4,986	4,685	昭和30年町村合併に より、旧小野市村と 旧重岡村が合併し、 宇目村が発足。
40	1,882	8,089	4,056	4,033	
45	1,626	6,337	2,994	3,343	昭和36年11月3日町 制を施行し、今日の 宇目町成立。
50	1,537	5,606	2,650	2,956	
55	1,496	5,173	2,444	2,729	
56	1,494	5,083	2,399	2,684	
57	1,497	4,985	2,346	2,639	
58	1,483	4,831	2,248	2,583	
59	1,487	4,803	2,236	2,567	
60	1,484	4,785	2,253	2,532	
61	1,467	4,677	2,197	2,480	
62	1,455	4,585	2,160	2,425	
63	1,431	4,808	2,275	2,533	
平成元	1,413	4,673	2,215	2,458	
2	1,404	4,285	1,987	2,298	
3	1,396	4,230	1,949	2,281	
4	1,397	4,174	1,918	2,256	
5	1,394	4,108	1,889	2,219	
6	1,403	4,050	1,847	2,203	
7	1,411	4,098	1,897	2,201	
8	1,403	3,999	1,848	2,151	

(『統計で見た大分県』・『国勢調査報告書』・『宇目町統計書』により作成)

いるが、これは我が国の大陸侵略や徴兵などによる人口流出が原因ではないかと考えられる。人口統計資料がないのはつきりしないが、昭和一五年から二〇年の敗戦まで、人口が減少傾向にあったと推測される。

〈昭和三〇年にピーク、一万人近い人口〉戦後の昭和二二年には九四一八人、昭和一五年に比べると七年間に一三三四人、一六・五%と急増している。さらに、増加傾向を示し、昭和三〇年（一九五五）に九八九八人と一万人近い人口に達し、ピークを示している。これは戦争終結に伴う復員者、引揚者、さらに都市部からの流入者、ベビーブームによるところが大きい。

〈経済の高度成長長期より人口減続く〉宇目町の人口は、昭和三〇年をピークに、それ以後は減少を続けており、とくに我が国が経済成長をはじめた昭和三五年（一九六〇）ごろから減少傾向に移行し、平成七年（一九九五）まで国勢調査八期間連続減少していることは注目される。また、宇目町の人口は昭和三〇年九八九八人から平成七年の四〇九八人と、四〇年間に五八〇〇人、五八・六%

激減している（県人口はこの間に三・六%減少）。

また、平成二年一〇月一日現在の国勢調査の結果をみると、前回の昭和六〇年に比べ、県下の五八市町村中五二市町村で人口が減少しており、全県でも減少率は一・一%となっている。人口が増加した市町村（大分市四・七%・中津市〇・二%・日出町四・五%・挾間町〇・九%・三光村〇・二%・姫島〇・二%）も増加率は低い。

さらに、人口が著しく減少した市町村をみると、宇目町（二〇・五%）をはじめ、佐賀関町（九・二%）・緒方町（八・八%）・朝地町（八・七%）・清川村（八・四%）・竹田市（八・二%）・野津原町（八・一%）・国見町（八・〇%）がある（以上は減少率八・〇%以上）。

大分県の平成二年の国勢調査結果について新聞報道では次のように伝えている。

今回の調査の特徴は人口を決める要素となる自然増が大きく低下、社会減が大幅に増えた点。前回と比較すると自然増は二万七一六三人から一万四七八一人と、約一万二〇〇人減少、また社会減は一万〇二〇五人から二万二七九五人と約一万二〇〇人増

加している。自然増の減少は出生数の減少に因るところが大きい。社会減の増加は景気拡大で労働力が東京圏に流れ出たとみられる。今回の調査からみても県下の過疎は一段と進んだことになる。それだけに人口減となった市町村の受けとめ方は深刻で、減少率が一〇・四五%と県下で唯一、二ケタの減少率となった宇目町は「町内に雇用の場が少なく若い人が残らないことが減少の大きな理由。日本の産業構造に変化がないかぎり一自治体で過疎歯止めを決め手はない。このままでは老人ばかりの町になる。せめて県下町村で三番目に広い町面積を有効に活用できる方法でもあれば」(野下一成町企画課長)と苦悩する(中略)。今回の調査について平松知事は「自然増の減少傾向と東京圏集中が原因。企業誘致を進めると同時に西暦二〇〇〇年を目標に策定した二一県長期総合計画の諸施策を推進、若者定住を中心とした人口増加策に努力したい」などとコメントしている(『大分合同新聞』平成二年二月二七日本版)。

また、宇目町では昭和六〇年の一四八四世帯に対し、平成二年では一四〇四世帯と、八二世帯(五・五%)も

減少しており、挙家離町による人口流出も続いている。

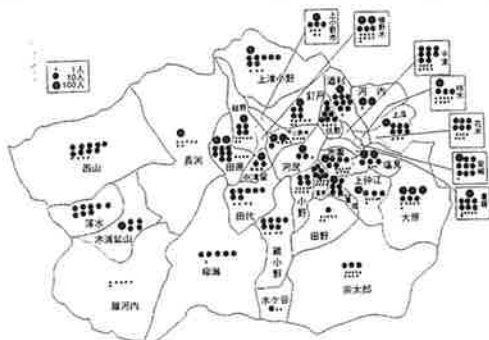
二 人口分布と人口密度

〔町の東部に多い人口〕宇目町の人口分布をみると、第2表・第2図のとおりである。第2図で明らかのように、人口分布は町の中央部から東部にかけて密で、西部及び南部に粗であることがわかる。すなわち、町を南北に貫流する市園川・田代

川の上・中流域の谷底平野(小野市・重岡の盆地底)に集中している。また、町の東端部の交通の要地、大原地区も比較的多い。

町の西部から南部にかけては、傾山から新百姓山・夏木山・桑原山などの一〇〇メートルをこえる急

第2図 宇目町の行政区別人口分布図(昭和60年)



第2表 地区別世帯数及び人口

区 名	昭和 30 年		昭和 55 年		平成 2 年	
	世帯数	人 口	世帯数	人 口	世帯数	人 口
重 岡	47	272	49	176	48	158
市 園	33	170	44	157	41	155
官 野	17	118	16	68	15	65
小 野	14	80	10	47	10	39
藏 小 野	27	206	16	72	16	70
田 野	28	188	27	108	26	104
水 ヶ 谷	10	54	6	19	4	14
宗 太 郎	85	332	17	42	15	34
上 仲 江	50	264	46	157	38	130
大 原	186	805	116	349	105	283
塩 見	61	355	72	246	63	188
花 木	42	221	22	70	21	59
上 爪	56	315	48	188	47	135
河 内	77	481	64	242	58	159
河 尻	34	211	36	140	35	113
伏 野	22	120	27	95	27	83
千 束	34	151	28	103	29	86
岩 崎	60	260	56	192	50	147
豊 藤	40	199	58	184	50	154
柿 木	39	180	40	138	40	127
酒 利	67	348	49	213	49	153
上 津 小 野	65	332	48	175	50	154
釘 戸	45	261	40	143	37	123
上 小 野	36	187	47	138	48	138
下 小 野	77	367	92	263	79	200
楢 野	59	251	73	257	73	228
中 津	38	205	33	137	33	117
越 野	46	243	47	154	52	142
田 原	101	503	79	286	79	270
田 代	33	204	20	84	17	55
柳 瀬	49	249	19	70	14	49
長 淵			31	99	24	78
中 岳	25	137				
葛 葉	47	211				
奥 江	34	154				
西 山	50	284	29	118	25	71
木 浦 敏 山	134	544	63	152	59	123
落 水	30	181	24	81	23	75
藤 河 内	10	64	4	10	4	6
傾 山	27	79				
板 戸	32	112				
合 計	1,967	9,898	1,496	5,173	1,404	4,285

(『国勢調査報告書』・『宇目村の概要』
(宇目村・昭和33年版) により作成)

峻な山地が広がり、深い溪谷を刻み、平地に恵まれない。そのため、人口も希薄で山岳地帯は無住地域も多い。

昭和六〇年（一九六五）の総人口四七八五人のうち、重岡地区二七六六人・小野市地区二〇一九人で重岡地区が総人口の五七・八%を占めている。

〈希薄な人口密度・一平方キロ当たり一五・四人〉宇目町の平成七年の一平方キロ当たりの人口密度は一五・四人で、県下五八市町村の中で最下位で、著しく希薄である（大分県一九四・三人、市部四九六・〇人、郡部七一・五人）。このように、宇目町が人口密度が著しく希薄であるのは、町域の大部分が標高二〇〇以上の九州山地で、総面積の九三・四%は森林で占められており、平野に恵まれないためである。

三 人口の構成

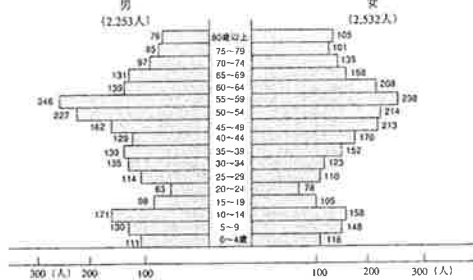
〈女子一〇〇に対し、男子八五・九人〉平成八年の宇目町の男子人口は一八四八人、女子人口は二二五一人で、女子は男子より三〇三人多い。人口の性比は女子一〇〇に対し、男子八五・九人で、大分県平均八九・六人より

低い。

〈老年人口は二九・一%と著しい高齢化進行〉宇目町の年齢別人口構成を示すと、第3図のとおりである。第3図で明らかのように、宇目町の人口ピラミッドはつりがね型をしている。すなわち、出生率が低下するにたがってピラミッドの底の年少人口はへこみ、死亡率の低下によって生産年齢人口、老年人口が増大してこの型になったのである。五歳階級別の人口構成図は一般的に富士山型・つりがね型・つぼ型へと発展移行すると考えられている。

いま、宇目町の人口ピラミッドの特徴を第3図でみると、①一〇―一四歳が三九人で総人口の六・九%にあたり、多いがこれは昭和四六年―四九年の第二次ベビーブームによるものである。②二〇

第3図 年齢階層別人口構成



'88 町勢要覧「宇目町」による。資料は昭和60年国勢調査

一四歳は一四一人で、総人口の二・九%で最もすくないが、これは進学・就職などによって若年層が町外に流出したからである。③九歳以下の著しい落ち込みは、昭和四〇年以降の出生率の低下を反映している。④六〇―六九歳の男子は、太平洋戦争当時二〇―三〇歳に相当しており、女子に比べて著しく少ないのは戦争の影響によるものと思われる。

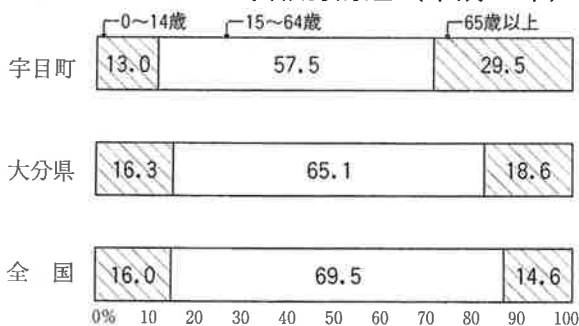
また、年齢別人口を三区区分して示すと、第4図のとおり

第3表 年齢別人口の推移

年別	幼年人口 0~14歳	出 産 年 齢 人 口				老年人口 65歳以上	総人口	対前比
		15~24歳	25~44歳	45~64歳	計			
	人	人	人	人	人	人	人	%
昭和45年	1,694	675	1,817	1,423	3,915	728	6,337	78
昭和50年	1,245	530	1,497	1,552	3,579	782	5,606	88
昭和55年	1,014	429	1,270	1,639	3,338	821	5,173	92
昭和55年 構成比	19.6%	8.3%	24.5%	31.7%	64.5%	15.9%	100%	—
10年間 減少率	40.1%減	36.4%減	30.1%減	15.2%増	14.9%減	12.8%増	18.4%減	—

(「宇目町基本構想・基本計画」(昭和58年)による)

第4図 人口の年齢別構造 (平成7年)



(「国勢調査報告」・「日本国勢図会」により作成)

である。すなわち、平成七年における〇―一四歳の幼年人口が二三・〇%で、大分県の二六・三%、全国の一六・〇%に比べ著しく低い。さらに、生産年齢人口も五七・五%で、大分県六五・一%、全国六九・五%よりも低くなっている。

一方、六五歳以上の老年人口では、二九・五%を占め、大分県の一八・六%、全国の一四・六%に比べて著しく高く、人口の高齢化が急速に進行していることがわかる

(第3表参照)。

厚生省人口問題研究所の推計によると、六五歳以上の

第4表 産業別人口構成 (単位：人，%)

	昭和35年		昭和45年		昭和60年		平成2年		平成7年	
	字目町 就業人口 割合	全国割合	字目町 就業人口 割合	全国割合	字目町 就業人口 割合	全国割合	字目町 就業人口 割合	全国割合	字目町 就業人口 割合	全国割合 (平均年)
総数	4,426	100.0	3,281	100.0	2,440	100.0	2,136	100.0	2,047	100.0
第一次産業	2,840	64.2	2,006	61.2	1,003	41.1	737	34.5	596	29.1
農業	2,267	51.2	1,846	56.3	779	31.9	552	25.8	442	21.6
林業	573	13.0	159	4.9	222	9.1	183	8.6	151	7.4
漁業	—	—	1	0.03	2	0.1	2	0.1	3	0.1
第二次産業	792	17.9	362	11.0	585	24.0	644	30.2	634	31.0
鉱業	103	2.3	27	0.8	18	0.8	13	0.6	9	0.4
建設	575	13.0	175	5.3	293	12.0	280	13.1	295	14.5
製造	114	2.6	160	4.9	274	11.2	351	16.5	330	16.1
第三次産業	794	17.9	913	27.8	852	34.9	755	35.3	816	39.9
電気・ガス・蒸気熱・水産業	18	0.4	20	0.6	7	0.3	3	0.1	7	0.3
運輸・通信業	123	2.8	158	4.8	91	3.7	89	4.2	85	4.2
卸売・小売業・飲食店	297	6.7	318	9.7	323	13.2	269	12.6	284	13.9
金融・保険業	14	0.3	18	0.5	13	0.5	10	0.5	8	0.4
不動産業	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
サービス業	275	6.2	313	9.5	315	12.9	276	12.9	329	16.1
公務(他に分類されないもの)	67	1.5	87	2.7	102	4.2	108	5.0	102	5.1
分類不能の産業	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

(『国勢調査報告書』, 全国は『日本国勢図会』による)

老年人口は今後急速に増加し、総人口の割合は二〇〇年には一六・二％、二〇二一年には二三・五％に達する。

その後も上昇を続けて二〇四〇年には二四％に達するが以後は次第に低下する。現在、一五―六四歳の生産年齢人口は一〇人で老人と子供四・六人を養っているが、二〇一七年には一〇人に六・七人の割合となり、働く世代の負担はかなり重くなることが予想される。

〈一次産業は二九・一％と高率〉宇目町の産業別人口構成をみると、第4表のとおりである。第4表で明らかにように、昭和三五年（一九六〇）の就業者総数は四四二六人であるが、三五年後の平成七年（一九九五）では二〇四七人と、二三七九人減少していることがわかる。

産業別では、農業（一八二五人減）・林業（四二一人減）・鉱業（九四人減）・建設業（二八〇人減）など減少が目立つ。また、増加したものは製造業（二二六人増）が最も多く、サービス業（五四人増）・公務（三五人増）などとなっている。

さらに、産業別の就業者数の割合をみると、第5表のとおりである。すなわち、平成七年では第三次産業が全

第5表 産業別の就業者数割合

(単位：％)

		昭和35年	昭和40年	昭和45年	昭和50年	昭和55年	昭和60年	平成2年	平成7年
宇目町	第1次産業	64.2	60.1	61.2	50.4	45.3	41.1	34.5	29.1
	第2次産業	17.9	16.5	11.0	18.2	22.4	24.0	30.2	31.0
	第3次産業	17.9	23.4	27.8	31.2	32.3	34.9	35.3	39.9
	分類不能	-	-	-	0.2	-	-	-	0.0
全国	第1次産業	32.6	24.6	19.4	13.9	10.9	9.3	7.1	5.8
	第2次産業	29.2	32.0	34.0	34.1	33.5	33.0	33.3	33.4
	第3次産業	38.2	43.3	46.6	51.7	55.3	57.5	59.0	60.3
	分類不能	0.0	0.1	0.0	0.3	0.3	0.2	0.6	0.5

〔国勢調査報告書〕、全国は〔日本国勢図会〕による

(注)平成7年の全国の就業者数割合は統計が欠けているので、参考に平成6年の統計を採用した。

体の三九・九%を占めて最も多く、次いで第二次産業三一・〇%、第一次産業二九・一%となっている。第三次産業の比率の推移をみると、昭和三五年一七・九%、四〇年二三・四%、四五年二七・八%、五〇年三一・一%、五五年三一・三%、六〇年三四・九%と国勢調査ごとに確実に増加しており、平成二年には三五・三%、同七年に三九・九%と高率になっている。しかし、宇目町の第三次産業の比率は、全国平均と比べると、全国平均の昭和三五年三八・二%とほぼ同率で、経済のサービス化はおくれていることがわかる。

産業の発展と経済・社会の複雑化とともに産業別就業人口の比率を変えていく。一般的には、第一次・第二次産業から第三次産業へと就業人口が移動しており、経済のサービス化が進行する。

〈高・中年層が圧倒的に多い産業就業者〉　いま、昭和六〇年（一九八五）の国勢調査によって、宇目町の産業別就業者の状態をみると、五五―五九歳が三七五人と最も多く、続いて五〇―五四歳が三六一人、四五―四九歳三一〇人、四〇―四四歳二五人の順で多く、高・中年層

が圧倒的に多くを占めており、青年層が少ない。なかでも、全就業者の三一・九%を占める農業就業者の高年齢化が目立つ。すなわち、農業就業者七七九人のうち五三人で、農業就業者数の六八・三%を占めていることが明らかである。

また、農業では二〇―二九歳が二三人、三〇―三九歳が八四人と極めて少なく、農業の後継者不足を物語っている。林業就業者数は二二二人で、五〇歳以上が一二六人で、林業就業者数の五六・八%にあたり、圧倒的に高年齢層が多い。第二次産業や第三次産業では第一次産業に比べて若年層や壮年層が多い。

さらに、就業者の状況を男女別にみると、農業・林業・建設業・運輸・通信業・サービス業・公務では男子が多く、製造業・卸売・小売業・飲食店では女子が多い。一般的にサービス業は女子が多いが、宇目町では男子が多くなっているのは注目される。

（以下次号）